

3者連携 伊賀米で育てる伊賀牛

高付加価値、地産地消に「夢の餌作り」の取り組み

伊賀地域の産と稲作農家、機械メーカーの3者連携して、伊賀米で伊賀牛を育てるための「夢の餌作り」に取り組んでいる。水田の有効利用や地産地消の推進、付加価値の高い伊賀牛の生産などを目指す。



▲奥田ゴールドファームの牛舎では通常の餌に発酵飼料米を混ぜて与えている＝伊賀市比土で

名張市と伊賀市で牧場を経営する奥田ゴールドファーム(奥田龍己社長)は、「付加価値の高い伊賀牛を育てよう」と、昨年からは伊賀市上友田のヤマノS.A.N(川瀬秀隆社長)が栽培した「あきたこまち」と「みえのゆめ」を餌に混ぜて与えている。



当初はもみ殻がついた米をそのままの状態を与えていた。しかし、消化に時間がかかったり、消化されずに糞として排出された



▲粉碎機で細かくした発酵飼料米

め、食べやすい形にする方法を求めて、名張市夏見の農作業機械メーカー、タカキタ(松本充生社長)に相談した。同社が国内で取り扱いはじめた

飼料用穀物粉碎機「ミリングマシン」を使って、もみ殻と米を2/3以下の大ききまで砕いたものを与える。以前より消化するようになった。更に、飼料米をビニールで密封し乳酸菌発酵させる技術「ソフトグレンサイレージ」を併用することで、食べる量も上昇したという。



▲粉碎機の改良点を話し合うタカキタの従業員たち＝名張市夏見で

奥田社長(38)は「外国産のトウモロコシや麦を育てるより、伊賀米の方が脂肪の低いサシ(肉に付着する脂肪)が付きやすいことが分かった。口当たりが良く、胃もたれしにくい肉ができる」と期待する。

ヤマノS.A.Nは、現在約6万平方メートルで飼料米を栽培しており、水田では同ファームの堆肥を使用し、収穫した稲わらも飼料として提供している。栽培量も増やしていきたいという川瀬社長は「地元の安心安全な飼料米を提供し、畜産農家の牛糞尿を堆肥として使うことで、循環型農業にもつながるのでは」と期待している。

(出典:株式会社ユニ、「3者連携 伊賀米で育てる伊賀牛」、伊賀タウン情報YOU、第672号、2016年3月、22ページ)